

首長層でした。日向・大隅地域の首長層もまたヤマト王権と深い繋がりを持っていたのです。横瀬古墳が畿内色を色濃く残しているのはそのためです。それでは、海上交通を掌握していた日向・大隅の首長層が、具体的にどんな役割を果たしていたのでしょうか？これについて以下のとおり想定を挙げてみます。

1つは有明海沿岸および玄界灘沿岸勢力が朝鮮半島との対外交渉に關与するのに対して、日向・大隅地域勢力は南西諸島を経由しての中国南朝との直接的対外交渉に關与していたという考え方です。

古来より南西諸島とを結ぶ交易ルートが確立していました。このような南九州で培われた航海技術がヤマト王権にとって必要とされていたと考えられなくもありません。確かに百済から宋へと渡る航路が最も近い航路です。しかし、緊迫した朝鮮半島の航路は必ずしも安全とは言えない可能性もあります。そこで南西諸島への航路を模索したという想定です。

ただし、この時期南西諸島と日向・大隅地域を結ぶ資料あまりないというのが事実です。南西諸島で出土している成川式土器も弥生時代終末期までで、古墳時代以降は著しく減少しているようです。日向・大隅地域

では地下式横穴墓に南海産貝製品として貝釧<sup>かいしろう</sup>が出土しますが、筆者の想定の決め手とするには程遠いでしょう。これについてはさらなる検討が必要です。

2つ目は、有明海沿岸および玄界灘沿岸勢力とヤマト王権を結ぶ役割を担っていたという考え方です。弥生時代から瀬戸内地域・東九州の海上交易ルートが発達していました。これは畿内と九州を結ぶ重要な航路になり得たことは言うまでもありません。朝鮮半島から流入したの人材や文物を直接畿内に運搬する役割を担っていたと考えます。

上記の内容をさらに膨らませると、有明海沿岸または玄界灘沿岸の勢力が朝鮮半島の深く結びつくことでヤマト王権の脅威となるのを抑制する軍事的役割を担っていたという考え方もあります。5世紀になって、朝鮮半島では新羅が高句麗への従属から脱却する動きを見せます。これに応じて433年に百済と新羅が和睦し、以降5世紀にわたって百済と新羅は軍事的連携を図っていくのですが、この動向はヤマト王権としても注視しておく必要があったでしょう。また、朝鮮半島の新たな展開の中で、有明海沿岸または玄界灘沿岸の勢力が朝鮮半島と独自の交流関係を持つことは、ヤマト王権にしてみれば脅

威であった可能性もあります。事実、後の527年に筑紫国磐井<sup>つきのくにい</sup>が新羅と手を結び、ヤマト王権と朝鮮半島南部の利権を奪い合う『磐井の乱』が勃発します。古墳時代は古代国家の形成過程段階です。律令による中央集権体制が確立する以前は、各地の首長層とのネットワークは主に『人』『もの』の行き交う中で培われた信頼関係で成立していました。特に朝鮮半島と深くつながる北部九州勢力は、ヤマト王権にとって重要なパートナーでありましたが、それは『諸刃の剣<sup>もろはづるき</sup>』的存在でした。

現在でも横瀬古墳は当時の姿をほぼ残しています。墳形がよく見えるので、県内外から多数の見学者が訪れます。今では、古代のロマンを語る郷土のかけがえのないモニュメントです。かつてはヤマト王権の海上交通拠点として政治的な意味合いを持つモニュメントでした。日本という国家の基礎がつくられようとする時代、横瀬古墳の被葬者もまた『海の民を統べる王』としてヤマト王権による『国づくり』の一翼を担っていたのです。

大崎町教育委員会

内村 憲和



【参考文献】

- ・東潮2015『第二章 中期古墳と東アジアの動向 倭の五王の時代の国際交流』『中期古墳とその時代—5世紀の倭王権を考える—』広瀬和雄編(株)雄山閣 P74-83
- ・一瀬和夫2011『巨大古墳の出現—仁徳朝の全盛—』(株)文英堂
- ・熊谷公男2015『第三章 文献資料から描く五世紀の大和政権 倭王武上表文の真意—いわゆる「高句麗征伐計画」を中心に—』『中期古墳とその時代—5世紀の倭王権を考える—』広瀬和雄編(株)雄山閣 P131-141
- ・重藤輝行2015『第一章 古墳時代中期の日本列島 九州』『中期古墳とその時代—5世紀の倭王権を考える—』広瀬和雄編(株)雄山閣 P20-29
- ・中村直子2013『ナガラ原東貝塚出土の成川式土器の位置づけ』『ナガラ原東貝塚の研究 5世紀から7世紀前半の沖繩伊江島』木下尚子編 熊本大学文学部木下研究室 P259-266
- ・広瀬和雄2015『第1部 海浜型前方後円墳を考える』『海浜型前方後円墳の時代』公益財団法人かながわ考古学財団編(株)同成社 P1-38